

登場人物

向井ミキ

柿谷玲子

清水愛

細川友梨

真野さおり

向井のぞみ

#1

夏の午後。かすかに蝉の声が聞こえる。

向井、真野、清水、細川、柿谷が住むシェアハウスのリビング。

向井が鼻歌で『聖者の行進』を歌いながら現れ、洗濯物をたたみ始めた。

そこへ道具箱を持った柿谷が現れる。

柿谷 あ、ごめん。

向井 え。

柿谷 当番私やのに。

向井 ああ。いいですって。好きでやってますから。

柿谷 今日数値高いつて言うてへんかった？

向井 大丈夫。風向き変わったって。

柿谷 そうなん。

向井 代わりに明日がアカンかも。また測ってみますけど。

柿谷 まだまだ不便やね。

向井 全然マシですよ。前にいた所は洗濯物どころか息するのも怖かったですから。

柿谷 まあなあ。

向井 やっぱりに外に干せるっていいですよね。

柿谷 なあ、これ見つけてん。

向井 風鈴。

柿谷 南部鉄。

向井 おー。

柿谷 吊ってもいいかな。

向井 吊りましょ吊りましょ。

柿谷、風鈴を吊るし、団扇で風を送った。ちりんと鳴る風鈴。

向井 いいですねえ。

柿谷 ちよっとは涼しい気がするやろ。

向井 はい。

柿谷 風鈴の音を聞くと、頭の中で「風が吹いている」ってイメージされて、それが抹消神経に働きかけるから体温が下がるんやって。

向井 下がるんですか。気のせいじゃなくて。

柿谷 うん。科学的に実証されてる。

向井 科学か。

再び風を送る。風鈴が鳴る。

柿谷 あー。

もう一度風を送る。風鈴が鳴る。

柿谷 あー。

さらに風を送る。風鈴が鳴る。

柿谷 あー。いいわー。

向井 すいません。風鈴はいいんですけど、もうちょっと静かに味わってもらえませんか。

柿谷 え。

向井 なんか柿谷さんの「あー」でせっかく下がった温度が2度ぐらい上がってる気がするんですよ。

柿谷 ごめんごめん。

向井 頼みますよ。

柿谷 じゃあ静かに。

風を送る。風鈴が鳴る。しばらく。

向井 風に吹かれるとか、もう長いことなかった気がしますね。

柿谷 うん。

向井、柿谷に手を出した。柿谷、察して団扇を渡す。向井、風鈴を鳴らした。

柿谷 風の記憶。

向井 何でもないようなことが、幸せだったんですね。

柿谷 どっかで聞いたことあるフレーズやな。

向井 あー、堪能した。ごちそうさまでした。

柿谷 ごちそうさまでして。あ、なあ、この風鈴、ここに置いといたらみんな好きな時に鳴らしてくれるかな。

向井 いいですね。

柿谷 よし、メモ貼っとこ。向井さんも好きに使っていいよ。

向井 ありがとうございます。

向井 ふたたび洗濯物を畳みながら鼻歌を始める。

柿谷 なあ、何やったっけ、それ。

向井 え。

柿谷 曲、曲。

向井 ああ、『聖者の行進』です。

柿谷 そうそう、聖者の行進。

向井 これ干してたらね、聞こえてきたんです。ブラスバンドの演奏が。

柿谷 ブラスバンド。

向井 なんかわかしいなーと思って。

柿谷 向井さんブラバンやったん。

向井 はい。

柿谷 へー。

向井 朝昼放課後、ずーっと練習してました。ブラバンって文化部やけど体育会系なんですよ。

柿谷 パートは何やったん。

向井 ユーフォでした。

柿谷 ユーフォ。

向井 ユーフォ。

柿谷 え。

向井 ユーフォニアムです。ユーフォは未確認飛行物体。

柿谷 違うの。

向井 違います、って言うてもわからないですよ。チューバの小さいやつなんですけど。

柿谷 チューバ。

向井 こう、お寺の鐘を逆さにしたような形で、手元でぐるぐるしてる大きい楽器があるじゃないですか。

柿谷 ああ、見たことあるかも。

向井 そういう形の大きいのがチューバ、少し小さいのがユーフォです。

柿谷 へー。

向井 まあ、そう言われてもわからないぐらい地味な楽器です。

柿谷 ごめん、なんか。

向井 いえ、慣れてますから。私もね、最初はサクソとかフルートとか、もっと華やかな楽器を希望してたんですけど、そういう人気のある楽器って倍率も高いんですよ。

ね。それでジャンケンで全部負けて、結局ユーフォ。

柿谷 仕方なく。

向井 はい。でも実際吹いてみたら悪くなかったんです。素朴っていうか、味のある音で、

イギリス民謡なんか吹くと田園風景が感じられるっていうか。

柿谷 田園風景。

向井 はい。まあ、なんでもね、やってみると情が湧くもんですね。

柿谷 ユーフォか。

向井 ユーフォ。

柿谷 ごめんごめん。

向井 (楽器を吹く手振り) ブン、ブン、ブン、ブン、ブン、ブン、ブン、ブン、ブン、ブン、
ブン、ブン、ブン、ブン、ブン。

柿谷 えーっと、

向井 ね、ちょっと主旋律を吹いてもらっていいですか。

柿谷 吹くって。

向井 主旋律はトランペットやから(手振りで構えて見せる)こうですね。

柿谷 (真似して)こう。

向井 そう。それで、パ、パ、パ、パ、パー、って。

柿谷 (歌うように)パ、パ、パ、パ、パー、

向井 そうそう。

柿谷 大丈夫？私すごい痛いことになってん。

向井 大丈夫ですって。いいですか、せーの、

柿谷、「聖者の行進」の旋律を「パ」の音で歌う。向井はユーフォのパートと思
われる伴奏を口で「ブン、ブン」言いながら歌に合わせる。

♪ (Oh, when the saints go marching in)

(Oh, when the saints go marching in)

柿谷 おー。

(続けた)

♪ (Lord, how I want to be in that number)

(When the saints go marching in)

二人 おー。(拍手)

向井 (続けようとする)ブン、ブン、ブン、ブン、ブン、

柿谷 もういいって。

向井 すいません。

柿谷 あのさ、ちよっと思ったんやけど。

向井 はい。

柿谷 『聖者の行進』やんな、この曲。

向井 ええ。

柿谷 聖者って、誰。

向井 え。

柿谷 だから『聖者の行進』の聖者。誰なん。

向井 さあ。聖者っていうぐらいやから、やっぱり偉い人じゃないですか。

柿谷 偉い人。

向井 はい。

柿谷 王様とか。

向井 権力者じゃないと思いますよ。

柿谷 じゃあ何？

向井 宗教家とか。

柿谷 宗教ね。

向井 たぶんキリストちやいますか。

柿谷 キリスト。キリストの行進。

向井 ええ、たぶん。

柿谷 でも行進って一人ですか。

向井 え。

柿谷 いやだつて行進って、もつときょうさんの人がぞろぞろ練り歩くから行進って言う
んとちゃうの。

向井 確かに。

柿谷 キリストって何人もいるわけじゃないよね。

向井 一人ですね。

柿谷 じゃあ行進やけど一人で進んでいくってことなん。

向井 ー。

柿谷 それとも他の誰かと歩いてるってことなんやろか。

向井 誰かって誰？

少し間。

細川が現れた。

細川 柿谷さん

柿谷 なに。

細川 ボンド、見ませんでしたか。

柿谷 ボンド。

細川 はい。

柿谷 ああ、ボンドね。

細川 貸してもらっていいですか。

柿谷 (探して差し出す) えーっと、はい。

細川、受け取ろうとしたが、ふと手を止めた。

細川 セメダインの方がええんかな。

柿谷 ここにはないけど。

細川、首を傾げながら去った。

柿谷 細川さん。

向井 どうしたんですかね。

柿谷 さあ。

戸口から話し声が聞こえ、清水と真野があらわれた。二人は着用していたマスクを取った。

清水 あつー、ただいまー。

真野 ただいまー。

柿谷 おかえりー。

向井 おかえりー。結構かかったね。

清水 めっちゃ混んでん。なあ。

真野 ええ。薬局の方もすごい人で。

清水 病院ってなんでもあんなに人がおるんやろ。

真野 みんな具合悪いんですよ。

清水 せっかく休みやのに、ぜんぜん休んだ気せえへんわ。

真野、困ったように微笑んだ。

清水 あ、なあ、駅であれ見たで。

向井 あれって。

清水 ブラスバンド。

向井 ああ、駅やったんや。

清水 聞こえてたん。

向井 うん、こつちまで聞こえてた。

柿谷 『聖者の行進』

清水 そうそう。

真野 軍楽隊です。

清水 え。

真野 ブラスバンドじゃなくて軍楽隊。軍の楽団です。

清水 ああ、そっか。

向井 軍って何かあったん。

清水 なんかな、偉い人の講演会があるんやって。

向井 そのの宣伝。

真野 ええ。

向井 そんなところにお金かけるんやったら、治療費まけてくれたらええのにな。

真野 そうですね。

清水 でも久々に見たわ。たくさん男の人。なあ。

真野 はい。

向井 若かった？

真野 私らと同じぐらいですよ。

清水 たぶんなあ。

向井 へー。

柿谷 徴兵と除染ですっかり見かけへんようになったけど、いるところにはちゃんとい
るんやね。

向井 どうやった？

真野 え。
向井 楽団。カッコよかった？
清水 まあ、制服来てたからなあ。三割増しで良くは見えなかなあ。
真野 メガネ率、高かったです。
向井 おー。
清水 え、二人共メガネ派？
真野・向井 はい。
清水 目悪いだけやん。
真野 いいんです。
向井 制服は？
清水 え、
向井 何色やった？
真野 紺色でしたけど。
向井 紺かあ。
柿谷 やっぱり白やよね。
向井 そうなんですよねー。
真野 パンツは白で、上着は紺でした。
向井・柿谷 あー。
向井 ぎりぎりアリですね。
柿谷 せやな。
向井 楽団かー。
真野 楽器、ピカピカでした。
向井 そうやろうなー。
清水 ずーっと音楽だけ演奏してたらいいのにな。
向井 ホンマに。そしたら私らも喜んで送り出すのに。
柿谷 なあ、そういえばどうやったん。
清水 え、
柿谷 病院。
真野 ああ、私の方は相変わらずで。
柿谷 相変わらず原因不明。
真野 とりあえず違う薬試してみましようって。
向井 貧血にしては長いことかかってるよな。
真野 再発じゃなさそうやけど、これで効かへんかったらまた検査かもって。
向井 そっか。
柿谷 清水さんは。
清水 え、うん。私の方は、まあ別に。
真野 え、
向井 なに。
柿谷 どうしたん。

細川、再びあらわれた。

細川 なあ。

清水 あ、ただいま。

細川 おかえり。なあ、ちょっとお願いがあるんやけど。

清水 どうしたん。

細川 カード、貸してくれへんかな病院の。

清水 カード。

細川 お願い。

清水 どないしたん。

細川 え、いや、ちょっと行こうかなと思て。

真野 行くなって今からですか。

清水 もう今日は診察終わってるよ。

細川 あー、そうか。そうやんなー。

清水 どうかしたん。

細川 あんな、(と言いかけたが言いよどむ) やっぱいいわ。

清水 言いや。気持ち悪い。

細川 うん・あんな、取れてん。

清水 取れたって何が。

細川 歯。

柿谷 えっ。

向井 歯。

細川 うん。アイス、買ってきてん、さっき。暑いし、みんなでおやつに食べよかなと思て。

向井 うん。

細川 でも清水さんも真野さんもなかなか帰ってけえへんし、先食べよかなと思て。

清水 それで。

細川 自分だけ先に食べたら悪いかなとは思ってんで。けど暑いし、どうしても食べたくなってもうて。

清水 別にいいんとちゃうの。自分で買ってきたんやろ。

細川 五本で一九八円の安モンやけどな。

清水 大事なのはその気遣いやって。

細川 正直バチあたったんかなと思て。

清水 なんて。

細川 先に食べたから。

清水 え。

細川 正確に言うとな、食べようとして一口かじってん。そしたらバキッて折れてもうて。

向井 バキッと。

細川 うん。奥歯が。

全員 えー。

細川 折れた時すごい音したから、絶対聞こえたと思つたんやけど。

柿谷 いや、全然。

向井 つまみ食いの音までは、ねえ。

細川 音って振動やねんな。自分の口の中で歯が折れる音って凄いで。バキッていうか、ガリッていうか。もう嫌な予感しかせえへんねん。うわ、私、なんか取れた。うわーっ、て感じ。おそろおそろ指で触ったらポロっと出てきて、ちよっと自分で戻してみたりして。けど全然くっつく気配なくって。

清水 今どうなってんの。

細川 ティッシュに包んでる。

向井 あ。もしかして。

柿谷 なに。

向井 それでポンド。

細川 セメダインのほうがいいかなとも思ってたんだけど。

全員 いやいやいやいや。

細川 けどよう考えたら歯にポンドはあかんなと思って。

清水 あかんやろ。

細川 セメダインも。

向井 うん。

細川 あー、もう、どうしよう。

柿谷 細川さん、いっかい冷静になろうか。

細川 人間てこんな歯一本で、すごい不安になれるんやな。

清水 今日はもう、どうしようもないんと違うかな。病院も終わってるし。

向井 明日にしたら。

細川 (ため息) はあー。

柿谷 気持ちわかるけどなあ。

全員 うん。

向井 ・・ちよっと見てもいい？

細川 えっ。

向井、細川の口の中を見ようとする。

細川 まって。

向井 なに。

細川 私同意してへんよ。

向井 じゃあして。

細川 なんで。

向井 なんでってなんで。

細川 嫌やん。他人に口の中見せるの。

向井 そうかな。

細川 めっちゃ恥ずかしいって。

向井 いいやん、見せてよ。なんかいい方法思いつくかも知れへんやろ。

細川 いい方法って。

向井 それはまだ思いついてないけど。

細川 じゃあアカンよ。

向井 見せてーや。な、な、

細川 嫌やっつて。

ドアを叩く音が聞こえた。清水、部屋を出ていく。

向井 大丈夫やっつて、ほら、あーんして。

細川 (口を閉じて) んー。

向井、細川の口を開けようとする。抵抗する細川。
のぞみを伴って清水が戻ってきた。

のぞみ おじやまします。

皆、一斉に見る。

向井 のぞみ、

のぞみ 久しぶり。

向井 どうしたん。

のぞみ お姉ちゃんこそ。

向井 私は別に、

向井、細川から離れた。

柿谷 妹さん。

のぞみ こんにちは。

柿谷 こんにちは。

向井 どうしたん。

のぞみ ちよつとな。泊めて欲しいなと思って。

向井 今日。

のぞみ うん。

向井 いきなり何言うてんの。

のぞみ ごめん。

向井 もっと前もって言うといってもらわんと、私も一人じゃないって知ってるやろ。

のぞみ ごめん。

少し間。

柿谷 えーっと、柿谷です。

のぞみ あ、はい。

柿谷 いちおう此処の代表ってことになってます。

のぞみ すいません、いきなり押しかけてしまっつて。

柿谷 私らはいいよ。なあ。

反対はないようだ。

向井 すいません。

柿谷 とりあえず、荷物置いてきはったら。話はまた後で。食事や片付けは手伝ってもらうと思うけど。

のぞみ ありがとうございます。

向井 おいで。

向井、のぞみを伴って出て行った。

清水 どうしたんやろ。

細川 突然やな。

清水 向井さんの妹さんって病院の寮に住んでたんじゃなかったっけ。

細川 じゃあ看護師さん。

清水 ちゃうかな。

細川 歯みてくれへんかな。

清水 それは無理やろ。

真野 病院の人やったら、いきなり外泊とか難しいんじゃないんですか。

清水 そうやなあ。

細川 もしかして、家出とか。

清水 あー、可能性あるかもね。

柿谷 そんな勝手に。

細川 でも聞くよな、よそで一緒に住んでる人同士、どうしても合わなくて共同生活が破綻するって。

清水 あるある、事件にまでなったところとか。

柿谷 さすがに事件は違うやろうけど。

真野 なんですか。

柿谷 いや、家族やったら急に会いたくなるってこともあるんちゃうかな、思て。

清水 家族な。

真野 いれば会いたくなりますよ。

細川 せやな。

柿谷 いればな。

清水 (話題を変えた) こういう共同生活の制度って、実際に外国であつたんやっとな。

真野 聞いたことあります。一人では生きていけない貧困層の人を救うための手法やっ

柿谷 でもどっちかっていうと、私らのこれは江戸時代にあつた五人組に近いんちゃうかな。

真野 五人組。

柿谷 年貢の取り立てを確保するために決められた連帯責任。

細川 年貢か。

柿谷 逃亡や犯罪も防ぐ。

真野 監視ってことですか。

柿谷 うん。

清水 じゃあ江戸時代の制度なん、これ。

柿谷 たぶんそうじゃないかなあ。

清水 逆行しすぎやろ、江戸時代って。

柿谷 お上の発想はそれぐらい全然変わってないってこと。

細川 五人組か・・・なんで五人なんやろ。

真野 なんですか。

細川 べつに四人でも六人でもいいんとちゃうの。

真野 そういえばそうですね。

清水 偶数がダメとか。

細川 なんで。

清水 意見が分かれた時に多数決できへんやろ。

真野・細川 おー。

柿谷、風鈴を鳴らした。

柿谷 お客さんも来たことやし、そろそろご飯の準備をしませんか。

蝉の声少し大きく聞こえた。

照明が変わり、全員で部屋を片付け夕食の準備を始めた。
転換。

#2

食卓にはバラ寿司の桶。皆の分を取り分けて全員席に着いた。

全員 いただきます。

清水 ー。

向井 多めに作ったんで、よかったらおかわりしてください。

柿谷 (細川に) 歯、大丈夫？

細川 一応。前歯で噛めば食べられます。

清水 リスみたいやな。

細川 放つといて。

真野 ちらし寿司って良い献立ですよね。

向井 やろ。便利やねん。何人いても対応できるし、沢山作ったほうが美味しいし。

真野 向井さんのちらし寿司って、必ずそぼろ入ってますよね。

向井 うん。うちは絶対入れている。

真野 珍しいけど美味しいです。

のぞみ え、入れないんですか、そぼろ。

真野 入れたことないですね。

清水 聞いたことあるけど、食べたんはここに来て向井さんの作ったんが初めてかも。

のぞみ そうですか。

細川 私も食べたことなかったなあ。

のぞみ やっぱりうちだけやったんですね。

向井 なつかしいやろ。

のぞみ うん。これこれって感じ。

真野 うちはいつも、うなぎを細かく切ったのを入れました。

全員 あー。

向井 うなぎかあ。

真野 もう手に入りませんけど。

細川 うちはツナ缶やな。それとミョウガ。

向井 ミョウガ、いいなあ。

細川 具だけで飲めそうやろ。

清水 うちはちりめんじゃこの佃煮入れるわ。それと高野豆腐。

全員 おー。

のぞみ 高野豆腐。

向井 絶対美味しいと思う。

清水 間違いないよ。

柿谷 うちはままかりかな。

全員 え、

柿谷 ままかり。

のぞみ なんですか、ままかりって。

柿谷 知らんかな、これぐらいの小魚で塩振って酢漬けにしたやつ。

清水 あー、聞いたことあるかも。

柿谷 ごはんを隣から借りてきてでも食べたくなるぐらい美味しいから「ままかり」って

言うねん。

全員 へー。

のぞみ 知りませんでした。

向井 ままかりか。

柿谷 まあ今はもう、なかなか食べられへんけど。

清水 なあ、ちらし寿司とバラ寿司って違うの？

向井 え？

清水 さつき真野さんは「ちらし寿司」って言うて、向井さんは「バラ寿司」って言うたから違うんかなと思って。

向井 一緒やろ。「ちらし寿司」も「バラ寿司」も。

柿谷 ちよつと違うよ。

向井 そうなんですか。

柿谷 酢飯の上に具を散らして乗せてるのが「ちらし寿司」。味をつけて煮込んだ具材を
ご飯に混ぜ込んだのが「バラ寿司」。

真野 じゃあこれはバラ寿司なんですな。

柿谷 うん。

細川 なんでバラ寿司って言うんやろ。

柿谷 え。

細川 具を散らすからちらし寿司っていうのは解るんやけど、じゃあバラって何かなど
思ってる。

のぞみ バラ。

向井 バラの花、とは関係ないよな。

柿谷 たぶんあれじゃないかな、バラバラにするのをバラすっていうから、バラ寿司。

細川 バラす。

柿谷 バラ寿司って江戸時代に一汁一菜令っていうおふれが出たから作られたって言われてるねん。

真野 一汁一菜って、おかず一つ、汁もの一つってことですか。

柿谷 昔大きい洪水があつてな、財政を立て直すために儉約令が出されてん。

向井 それで一汁一菜令。

清水 オカズが一つだけなんて、そんな毎日やったら耐えられへんな。

細川 絶対無理。

柿谷 当時の人もそう思ったんやろうな、普段は我慢できてもお祝いごととか、特別な日ぐらいちよつと贅沢したいやん。それで桶の底に具を敷いて、上に混ぜご飯をのせて、おかずをいっぱい食べられるようにしてん。で、食べる時は桶をひっくり返してバラバラにしたからバラ寿司。

のぞみ 法を目をくぐるための知恵ですか。

柿谷 うん。それぐらいは黙認してたっていう説もあるけど。

向井 へー。もつといろいろ黙認してほしいよな。

真野 いろいろですか。

向井 うん。いろいろ。

細川 なあ、そぼろってこれ、トリやんな。いつもトリを入れるの。

向井 あ、いや、本当は鯖で作るんやけど、なかったからトリで。

真野 鯖もなかなか食べられなくなりましたね。

向井 どうしてもね、安全な魚は高いから。

清水 うん。

向井 椎茸もね本当は入れたかったんやけど全然手に入らなくて。干し椎茸なんて尚更。

柿谷 そうやね。

向井 代わりに粉末のダシでそれらしくしてみたんやけど、やっぱり人工のものやとなかなか思ってた味になつてくれなくて。

真野 十分美味しいですよ。

柿谷 のぞみさんも手伝ったん。

のぞみ はい。卵焼けて言われたんで、焼きました。

向井 分厚いでしょ。全然錦糸卵になつてへん。

のぞみ すいません。普段全然料理してなくて。

柿谷 大丈夫。厚焼き卵を細かく切つてのせるっていうパターンもあるんやから。

のぞみ すいません。

清水 いつも食事はどうしてるの。

のぞみ 食堂があるんで、なかなか自分では。

清水 あー、そうか。

のぞみ 作れないとダメだとは思うんですけどね。

向井 そうやで。食べな生きていかれへんねんから。

のぞみ うん。練習する。

柿谷 病院やったら、なかなかそんな時間ないんやろ。

のぞみ ええまあ。(話題を変えた) 皆さんは同じ職場なんですよ。

柿谷 工場でネジ作ってる。

のぞみ ネジ。

真野 何に使われているか知りませんが。

清水 飛行機じゃなかったっけ。

向井 え、車って聞きましたけど。

細川 エンジンって聞いているよ。

のぞみ 何のエンジンですか。

細川 さあ、そこまでは。

柿谷 私らの収めた先の、さらに先の、さらに先ぐらいでない分からはんから。

真野 知りたいですよ。何に使われているか。

柿谷 まあなあ。

細川 動かしたくないエンジンやったら、納品拒否できたらいいのに。

のぞみ 動かしたくないエンジンって。

細川 それは言われへん。

清水 あるよな。

向井 あるある。

柿谷 そんなんいちち拒否したら仕事にならんよ。

向井 でも嫌なところにはイヤって言いたいですよ。

柿谷 まあな。

細川 嫌やなどと思ったら動かなくするとか、できたらいいのに。

全員 え。

細川 遠隔操作っていうか、Cの12番緩んどけて念じたら、エンジンが止まると

か。

向井 エスパーやん。

柿谷 後でバレたらただじゃ済まへんで。

細川 ネジ一本ずつまでわかりませんって。

柿谷 誰が作ったかわからなくても、どこの部署が出荷したネジかはわかるから皆に迷惑がかかるって。

細川 連帯責任か。

清水 1台や2台止めたって仕方ないよ。エンジンそのものを動かさずに済む方法を考えるんと。

のぞみ あの、止めたくないエンジンもありますよね。

清水 あるある。

細川 そういうところにだけ作れたらいいのにな。

真野 そうですね。

向井 あ、そういえば治ったん。自転車。

細川 ああ、取ってきたよ。

向井 よかったー。これで買い物がやっとなになる。

細川 タイヤ外れそうやったって。

向井 マジで。よかったー、外れなくって。

清水 走ってる途中でタイヤ取れたらコントロールやな。

真野 チェーンはよく外れてましたよね。

向井 外れてた。ガッツって踏んだらガラって取れて、治すのめっちゃ大変やってん。

真野 年季入ってましたから。

清水 自転車って寿命どれぐらいなんかな。

全員 ー。

細川 そらずーっとやる。

清水 ずーっと。

細川 消耗品さえ変えれば。人力やし。

全員、細川を見た。

暗転。

#3

夕食後。

細川は部屋の隅で本を読んでいた。

真野は清水と柿谷にツボ押しをレクチャーしている。

真野 じゃあ次は、膝の皿から指3本分あがったところ、ここが「血海」です。

柿谷 ケツタイ。

清水 ケツカイ。

真野 血の流れを良くしてくれるツボなんで、冷え性に効きます。

柿谷 (押す) なあ、痛いってのは滞ってるってこと？

清水 そうなんとちゃう。

真野 ちよっと押していいですか。(押す)

柿谷 イタタタタ・・・

清水 とどこおってるなあ。

真野 かなり詰まってそうですね。

柿谷 私すごい冷え性やねん。

真野 じゃあこっちはどうですか。くるぶしから指4本分上の「三陰交」。

柿谷 サンアンコー。

清水 麻雀やん。

真野 「サンインコー」は親指を重ねて深く押すんです。

柿谷 こう。

清水 これは私も痛いかも。

柿谷 滞ってる。

清水 滞ってる。

真野 押しましょか。

柿谷 私も押しましょか。

清水 待って待って。なんで二人。

柿谷 二人でやれば効果も倍増するかと思って。

清水 絶対やり返したいだけでしょ。

柿谷 そんなことないよ。ねー。

真野 大丈夫ですって、絶対気持ちいいですから。

清水 ウソ、絶対嘘や、あかんって、あーっ、

二人にツボを押されて痛がる清水。

柿谷 お客さん、凝ってますねー。

真野 (続けて) じゃあここはどうですか？(足首の後ろ側を掴む)

清水 痛っ、(逃げて)・・なにしたん、今。

真野 くるぶしの後ろから少し下にずらしたところの、アキレス腱の間のくぼみの「太谿(たいけい)」っていうツボです。ここが痛いってことは腎臓が弱ってるってことですね。

柿谷 へー。あっ、

清水、柿谷の足首を掴む。

柿谷 へっ、へっ、へっ、へー。

清水 うそお、痛くないの？

柿谷 私、ここは大丈夫やわ。腎臓やっただけ。腎臓は元氣やねんな。

清水 うわー、なんか悔しいわー。

のぞみが部屋に入ってきた。

のぞみ お風呂いただきました。

柿谷 はい。次、誰行く。

清水 私もうちよっとしてから行くわ。疲れた。

柿谷 真野さんは。

真野 私も後でいいです。

柿谷 じゃあ細川さん。

細川 んー。

真野 細川さん。

細川 え、

清水 お風呂入りって。

細川 ああ、うん。

真野 ずいぶん熱心ですね。何読んでるんですか。

細川 家庭の医学。いくらぐらいかかるか知りたかってんけど、値段までは載ってへんな。

清水 載ってへんよ、普通。

細川 治療代って時価なんかな。

清水 寿司屋ちやうねんから。

のぞみ 歯の治療代ですか？

細川 そうやねん。知ってる。
のぞみ だいたいでよければ。

細川 ホンマに。

のぞみ はい。私、学生の時バイトで歯科助手やってたんで、その頃の値段ですけど。

細川 いい、いい、教えて。

のぞみ 差し歯ですよ。取れた歯って見てもいいですか。

細川、ポケットから取り出した。

のぞみ あー。ちょっと口の中も見えていいですか？

と言いながらのぞみ、持っていたトートバッグの中からタオルを取り出して細川の首元にかけて。そして手際よくテーブルの上にあった割り箸の先を水に浸して細川に寄ると、

のぞみ 口開けてください。あー。

細川、思わず口を開けてしまう。

細川 あー。

のぞみ 少し触りますね。痛くないですか。

細川 らいひょうふ（大丈夫）。

のぞみ あー・・・はい、いいですよ。お口ラクにしてください。（離れた）えっと、ですね。ちよっと土台の状態があまり良くないですね。インプラントかブリッジを勧められるかも知れません。

細川 えっ。

のぞみ とりあえず、明日すぐに歯医者に行って診断してもらってください。

細川 あの。

のぞみ はい。

細川 土台の状態が良くないって。

のぞみ ええ。ちよっと根元の部分が少ないんですね。歯茎もかなり腫れてるので、差し歯を付け直しても、すぐにまた取れる可能性が高そうなんです。

柿谷 それでいくぐらいするの。

のぞみ インプラントだと四十万くらいかかると思います。

細川 よんじゅうまん。

のぞみ ブリッジだと保険が効きますから一番安いので二万ぐらいですね。

清水 それでも二万か。

真野 結構かかりますね。

細川 ブリッジって、横にある歯を削るんやろ。

のぞみ はい。

細川 横に歯がない場合はどうするの？

のぞみ 入れ歯になりますね。ブリッジは無理なんで。

細川、大きくため息をついた。

のぞみ とりあえず今すぐ決めなくてもいいとは思いますが。

細川 でも明日には決めなあかんねんやろ。

のぞみ いえ、歯を抜かずに済むかもしれませんし。すぐに結論を出すことはないと思います。

細川 でもなあ。（うなだれた）ショックやわ。

柿谷 そうやろうな。

細川 一九八円のアイスで四十万やって。違うわ、五本で一九八円やから一本三十九円。三十九円を一口かじっただけで四十万になるの。

清水 ブリッジやったら二万円って言うてたやん。

細川 でも何ともない歯を削らなアカンねんで。そんなん、もっとイヤやわ。

清水 そうか。

細川 あー、どうにかくつついてくれへんかなあ。

のぞみ そうですね。

細川 自分で接着剤でくつついたらアカンの。

のぞみ 危ないですよ。何かのはずみで、取れて喉に詰まったら、最悪命にかかりますから。

細川 そうかー。

柿谷 もう、プロがこう言うてるんやから、診察してもらい。

細川 でも、もし歯抜かなアカンかったら。

清水 仕方ないよ。今ある方法でどうにか治すしかないんやから。

細川 はー。（ためいき）

細川、立ち上がり、部屋を出ていこうとする。

柿谷 細川さん。

細川 お風呂入ってきます。一人で考えたいんで。

柿谷 ああそう。

細川 あ、のぞみさん。

のぞみ はい。

細川 ありがとう。先にはっきり言ってもらえて、ちよっとスッキリした。のぞみ どういたしまして。

細川 アイス、冷凍庫にあるから食べていいで。のぞみ はい。

細川、出て行った。

清水 どうするの？

のぞみ え、

真野 アイス、食べはるんですか。

のぞみ ええまあ。

清水 気つけて食べてな。

のぞみ はあ、

柿谷 細川さんの歯を折ったアイスやから。

のぞみ ああ、はい。がんばります。

のぞみ、出て行った。

柿谷、立ち上がる。

柿谷 私も。

真野 え。

柿谷 一緒に細川さんのカタキ取ってくる、

柿谷、出て行った。

真野 カタキ取るって、

清水 アイス食べたいだけちゃうかな。

真野 ですよね。

清水、自分で足首の後ろを掴んだ。

清水 なんやったつけ、腎臓のツボ。

真野 ああ、「タイケイ」です。やりましょか？

清水 いい、自分でする。(触る) あー、

真野 痛いですか。

清水 うん。腎臓もダメなんか、私。

真野 ダメっていうか、弱ってるだけですよ。

清水 歯抜いたら四十万かかるって。ほんなら私はいくらかかるんやろ。

少し間。

真野 あの、

清水 ん。

真野 言わないんですか。

清水 何を。

真野 その、

清水 今言うてもなあ。

真野 でも、

清水 まだ自分の中で整理できてへんねん。そんな状態で聞かされても、みんな困るだけやん。

真野 でも入院して精密検査受けるんなら早く相談しないと。

清水 わかってるよ。

真野 赤血球も白血球も血小板も数値足りへんって。

清水 わかってる。

真野 でも、

清水 わかってるって言うてるやろ。

真野 ……。

清水 ごめん。

真野 いえ。

清水 でもさ、いきなりすぎるやろ。骨髄移植が必要とか、造血幹細胞の異常とか。

真野 だからって黙ってても何も変わりませんよ。

清水 まだ自分でも受け入れられへんねん。治すためには全身に放射線浴びて、いっば

い抗がん剤投与して、自分で血を作る機能をいっかい奪わなあかん、とか。

真野 でも治すためには治療していかないと。

清水 私で最後やねんで。

真野 最後。

清水 この家の中で子供産める可能性があったの。

真野 ……。

清水 子育てするために、仕事と家事を分担しながら生活して下さいって、五人で暮ら

してるのに全員無理やったら意味ないやん。

真野 意味。

清水 ……。

真野 意味って、生きる意味ってことですか。

清水 違うよ。

真野 じゃあなんですか、意味ないって。

清水 それは・・・この五人でいるって意味やん。

真野 ありませんか、意味。

清水 ないよ。たぶん。少なくとも上はそう判断するかも知れへん。

真野 上。

清水 私らを集めてここに住ませてる、

真野 国ってことですか。

清水 まあ、そうやな。

真野 治療すれば可能性はあるんでしよう。

清水 あるよ。

真野 じゃああるじゃないですか。意味も、可能性も。

清水 でも、

真野 怖いですか。

清水 ……せやな。

真野 そうですよ。でも私は受けて欲しいです。治療。お金かかっても、時間かかっ

ても。できる限りのことはやってみないと、悔しいじゃないですか。

清水 自分の体じゃないからそう言えるんちゃうの。

真野 私も悔しかったですよ。

清水 ごめん。

真野 今も怖いです。毎日。

清水 ごめん。

真野 でも可能性はあるんやから。

清水 ……。

真野 って言うても、やっぱり他人事なんですよね。これも。

清水 正直、ホンマに整理できてへんねん。だってずーっと逃げてきてんで。それやの
に自分から放射線浴びて、それで治して、新しく血作る成分入れましようって、受け
入れられへん。この症状だって、何が原因なんかわからへんのに、ホンマに大丈夫な
んって思うし。まして子供なんて。ペットじゃあるまいし、みんなで仲良く育てまし
ようって、正気じゃないよ。

真野 そうですね。確かに正気じゃないですね。

清水 でも昔みたいになんか一人でやれ、っていうのも無理やねん。

真野 私、たぶん一人やったら、おかしくなってると思います。よかったですよ。ここに来られて。

真野、立ち上がる。

真野 私も食べます。アイス。

清水 ああ。

真野 カタキ、取らんと。

清水 (少し笑った) 気つけて。

真野、去った。

向井が『聖者の行進』を鼻歌で歌いながら入ってきた。

向井 なあ、後でいいんやけど、今晚このソファ使ってもいいかな。

清水 どうしたん。

向井 やっぱ二人はちよつと狭くって。

清水 のぞみさん。

向井 はい。

清水 いいんとちやう。

向井 ありがとう。

清水 あ、なあ。向井さん、明日のシフト早番やったやんな。

向井 そうやけど。

清水 よかったら代わるか。私遅番やし。そしたら明日十二時半入りになるで。

向井 あ、いいよ、別に。

清水 でも、久しぶりに会うたんやろ。

向井 そうやけど。なんか改めて話すことって、あんまりないねんな。ホンマになん
来たんやろ。ボーツといるだけで。

清水 ボーツと一緒にいたいんちやう。

向井 なに、それ。

清水 知らんけど。そういう時もあるんとちやうかな、と思つて。

向井 かえつて、みんながいてくれて助かったわ。

細川、現れた。

細川 清水さん、

清水 なに。

細川 お願いがあるんやけど。

清水 どうしたん。

細川 明日遅番やろ。シフト代わって。

清水 無理。

細川 えー、なんで。清水さん、遅番嫌いやろ。私明日歯医者行かんと。

向井 あ、そうか。

清水 あかんよ。もう向井さんに譲ってもうたんやから。

細川 え、なんで。

清水 せつかくのぞみさん来てるし、ちよつとでも長く一緒にいた方がいいやん。

細川 あー、そうかー。

向井 いいよ、私は早番でも全然。

清水 あかんよ。

向井 細川さんの方が深刻やろ。妹はいつでも会えるって。

細川 ほんまに、

清水 アカンよ。

向井 なんで。

清水 いつでもって思ってたなら、なかなか会われへんもんやん。

向井 まあ、そうかも知れへんけど。

清水 細川さんも歯は初診やろ。お昼までに診察終わって戻ってこられるかどうかかわらん。ちゃんと休み取ったらどう。

細川 それもなあ、考えたんやけどなあ。なんせ急な出費やから。

清水 気持ちはわかるけど。

細川 一円でも多く稼ぎたいやん。

向井 ー。

細川 ……。そういうことか。

向井 なに、

細川 向井さん、私、休み取るわ。

二人 え。

細川 やっぱり、そっちの方が大事やから。

向井 いいの？

細川 なんかな、さっきずっと考えててん。

清水 何を、

細川 私、何でもやもやしてたんやろうって。

向井 歯取れて。

細川 うん。

清水 もやもやしたって仕方ないやん。事故やったんやし。

細川 私も初めはそう思ってた。でもな、よく考えたら違うなって。

向井 違う？

細川 そもそも何でアイス食べようとしたかっていうとな、イライラしてたからやねん。

向井 イライラ。

細川 昨日、仕事終わりに連絡があったやろ。効率を上げるためにラジオの設置を撤廃しますって。

向井 ああ。

清水 あったなあ。

細川 あれ聞いたときにな、私、本当に、心の底からガッカリしてん。

向井 そんなに。

細川 だって、全員で訴えたやん。私たちは機械じゃない。そんなことしたら余計に効率が落ちるって。

向井 たぶん、予算が厳しいんとちゃうかな。

細川 そこやねん。そもそもそんな予算受け入れたらアカンやろ。だって今も安く売るために24時間機械をフル稼働させて、私らの休みや賃金そのものはカットしてるやん。そんなん絶対納得できへん。

向井 それで腹立ってたん。

細川 うん。

清水 確かに、私ら完全に奴隷状態やけど。

細川 しかも、これだけ安くしても、結局海外の方が安いからって、また乗り換えられるに決まってる。

清水 まあ、せやな。

細川 こんな状態で仕事しても、なんにも改善せえへんまま続くんや。私らが働けなくなっても他の誰かがこんな状態で働き続けさせられるんやって思ったらもう、腹が立って腹が立って。

向井 それでアイスかじって歯取れたん。

細川 そう。

清水 最後のところで因果関係が弱いんやよな。

細川 いいねん、因果関係とか。でも今ハッキリわかったことがある。

向井 なに、

細川 私、お金が憎いんや。

清水 え、

細川 お金がないと生きていけないのは知ってる。でも何をはかるにも全部の基準になつて、いつも振り回されて、いつも諦めさせられて、なんやったらそのために生きさせられるっていう現実が憎い。

向井 憎くてもしょうがないやん。

のぞみ、戻ってきていた。

細川 この前な、自分の身体を鏡で見てん。

二人 え。

細川 毎日8時間ずっと立ちっぱなし、やりたくもない仕事をし続けて、このまま年と

って死んでいくんやって思ったたらぞっとしたわ。

清水 それは、

向井 でもみんなそうやって我慢して働いてるやん。

細川 そこやねん、もっと腹立つのは。

二人 えっ。

細川 柿谷さん、もう何ヶ月も生理止まってるって言うてたやろ。

向井 うん。

細川 今も毎月病院通ってる。

清水 休むわけにはいかへんやん。

細川 向井さんは休憩どころか、トイレ行く暇もなくて膀胱炎になったこともある。

向井 もう今は気をつけて行くようにしてるよ。

細川 機械でケガなんて当たり前や。みんなどっか身体壊しながらどこに使われるか分からんネジを作り続けてる。

向井 でも、それが仕事やん。

細川 それが仕事なん。一日中、壊れへんように心閉ざして、身体痛めつけて、時間を切り売りして。私やっぱり思うねん。「私の手は本当にこんなことのためにあるんやろうか」って。

向井 え。

細川 「私の耳はこんな騒音を聴き続けるためにあるんやろうか」「私の頭はこんなことを考え続けるためにあるんやろうか」って。

二人 (返さなかった)

細川 仕事をすること自体は嫌いじゃないよ。人の役に立ちたい、ちよつとでも助けたい、何かをしたいって心底思っただけでやってるし、時々それができて、嬉しいと思う。自分で納得できて、それでお金も貰えたら嬉しいと思う。でもな、だからこそ人間らしく働けへんことが私にはは許されへんかってん。

清水 なあ、細川さん。

細川 なに。

清水 じゃあ私らの手や耳や頭は、なにをするためにあると思うん？

細川 (ちよつと考えた) 少なくとも私は、周りにいる大事な人を助けたり、支えたり、繋がったり、そういうことをしたかったって思う。

向井 周りの大事な人。

細川 もうおらんけど。大事やった人も、好きやった人たちも。

向井たち、のぞみに気がついた。

向井 のぞみ。

のぞみ お風呂、冷めるからと思って。

細川 聞いていい？

のぞみ はい。

細川 なんて看護師になろうと思ったん？
のぞみ ……。

細川 答えたくなかったらしいけど。

のぞみ いえ。・・・抵抗、したかったんです。

細川 抵抗。

のぞみ 発電所が攻撃されたじゃないですか。避難して、人がいっぱいケガして、病気になるのを見てたら、黙って見てるのが悔しくて。

細川 うん。

のぞみ でも結局抵抗って、何もできませんでした。思ったことの百分の一も全然やれてなくて。甘かったなって思います。

細川 でも偉いよ。

のぞみ 偉くないです。

細川 偉いって。少なくともここで何もせずに文句言ってるより何倍も。

のぞみ すいません。

向井 何謝ってんの。

のぞみ うん。・・・いや、そんな言われたらアカンっていうか。なんか、すいません。

柿谷が『聖者の行進』を口ずさみながら戻ってきた。
のぞみは去った。

柿谷 あっ、ゴメン！

向井 え？

柿谷 アイスあと一本やわ。

清水 カタキ取れました？

向井 カタキ、

柿谷 取れた取れた。楽勝。

細川 お風呂、行ってきます。(去る)

柿谷 どうしたん。

向井 いえ。私もアイスいただきます。

向井去った。

柿谷、風鈴を鳴らす。

柿谷 なあ、「ア、ピース、オブ、ケイク」って知ってる？

清水 え。

柿谷 英語の決まり文句で「ア、ピース、オブ、ケイク」。

清水 いいえ。

柿谷 ケーキひとつ分。つまりそれぐらい簡単に食べられるから「楽勝」。

清水 楽勝。

柿谷 ア、ピース、オブ、ケイク。ア、ピース、オブ、アイス。

清水 アイス。

柿谷 アイスひとつ分も楽勝。

清水 (少し笑った)

柿谷 ひとつ聞いていい。

清水 はい。

柿谷 今日病院で何かあった？

清水 え。

柿谷 なんかねー、何かあったんかなーと思って。言いたくないんやったらいいけど。

ルールやから。私らの。でもまあ、言わな始まらないってこともあるんとちゃうかな
ーとも思ってる。ア、ピース、オブ、アイス。

清水 柿谷さん、

柿谷 うん。

清水 今日、行ったじゃないですか、病院。

柿谷 うん。

清水 精密検査してくださいって。

柿谷 どうしたん。

清水 ちょっと大変な治療が必要かも知れませんか。入院して、お金も時間もいっぱ
いかかると思います。

柿谷 そっか。

清水 はい。

柿谷 治療法はあるの？

清水 一応。

柿谷 じゃあ、

清水 でも子供はちょっとわかりません。

柿谷 ・・うん。

清水 もし、もし、ですけど。

柿谷 なに。

清水 もし皆の同意がもらえたら、私、出て行ってもいいですか。

柿谷 出て行くって、ここを。

清水 はい。

柿谷 なんで。

清水 だって、このままいても、

柿谷 なに。

清水 誰も。

柿谷 それが理由。

清水 はい。

柿谷 それやったら、まずは治療してから考えたらいいんとちゃうの。

清水 でも、このままいても皆に迷惑かけるだけやし。

柿谷 全然、迷惑じゃないって。

清水 でも、このまま一緒にいても可能性が、

柿谷 可能性。

清水 私らが5人にいるのは、そのほうが都合がいい人がいるからじゃないですか。

柿谷 まあ、そうかな。

清水 同じ性別、近い年齢、5人一組のチームで仕事。お互いに助け合って、監視しあ
って、管理する人らにはとても都合がいい。

柿谷 うん。

清水 退屈になればバンクで子供を授かって、皆で育てて。仲良く、つつましく暮らして。みんなに都合のいい暮らし。

柿谷 うん。

清水 頭ではわかっているのに、なんでこんなに苦しいんやろ。

柿谷 私らといるのは、苦しい。

清水 違います。たぶん、もう、誰といっても苦しいんです。

柿谷 そっか。

清水 一人じゃなくて、支え合えて、それで助かっている部分はいっぱいあるのに。

柿谷 仕方ないよ。

清水 一人でいたくないのに、一人になりたい。

柿谷 せやな。

清水 今日ね、電車乗ったらね、一番後ろの車両やったんです。

柿谷 うん。

清水 真野さんと補助席だったら、目の前がガラス張りの運転席で、その奥に駅の車両止めがあつて。電車が発車して自分たちからその車両止めが遠ざかるんです。駅もすーっと離れて、そのうちビルの群れも真っ白な陽射しの中に溶けていくように遠ざかって、揺れて。

柿谷 うん。

清水 線路がゆるやかにカーブを描いて、それに合わせて街が線路の先の方に小さくなっていった。なんかそれ見てたら訳もないのに泣きそうになってました。

柿谷 なんで。

清水 ちょっと前まであの街の中に私いたのに、何の疑問もなく、あの街で暮らしてたのに、こんなに簡単に遠ざかるんやなって。

柿谷 戻りたいん。

清水 帰るとこなんか、もうないのは分かってます。でも目の前で自分から景色が遠ざかるのが、こんなに悲しく見える日があるなんて、今まで思ったことありませんでした。

二人、少し黙った。

柿谷 あのさ、すぐに決めなくてもいいんじゃないかな。

清水 え。

柿谷 いつまでって期限決められてるわけじゃないし。いなくなったら寂しいやん。

清水 でも。

柿谷 意味とか理由って苦しいで。苦しいのはもう十分やろ。

柿谷、風鈴を鳴らした。

暗転。

#4

のぞみ、窓の外に向かってペンライトを点滅させていた。

が、人の気配を感じて隠す。
毛布を持って向井があらわれた。

向井 起きてた？

のぞみ うん。おねえちゃん、それ。

向井 ああ。なんかね、たまには夜更かしでもしてみよかと思って。
のぞみ 明日も仕事やろ。

向井 遅番になったから。昼までに家出れば大丈夫。

のぞみ 私、朝早いで。

向井 明日？

のぞみ うん。

向井 そうなんや。まあ、そうやよな。

のぞみ、向井を見た。

向井 なに。

のぞみ べつに。

向井 ごめんな、こんなところで寝させて。

のぞみ 大丈夫。お姉ちゃんこそ。

向井 なに。

のぞみ 毎日あんな狭い部屋で。

向井 もう慣れたわ。だいたいあそこ部屋ちゃうし。

のぞみ あ、そうか。押入れ。

向井 っていうか、納戸。

のぞみ なんてわざわざ。

向井 この家、全員分の個室ないねん。

のぞみ ああ。

向井 なんとなく見たらわかるやろ。

のぞみ うん。

向井 せやから納戸とか押入れとか、それぞれの部屋にしてる。こういう共同の部屋は
まあ、部屋やからちよつと広いけど。

のぞみ みんなで広い部屋に寝えへんの？

向井 初めはな、そうしててん。でもパーソナルスペースっていうのかな、そういうの
がないとしんどくなってきたん。職場もおんなじやし、一人になれる場所がないとア

カンな、って話になって。

のぞみ それで納戸。

向井 どうせ寝るだけやし。あんたは個室？

のぞみ うん、でも二人部屋。

向井 広いの？

のぞみ 広くはないけど、まあしようがない大きさ。でもわかるな。

向井 なにが。

のぞみ パーソナルスペース。私らも、一人になれる時間が欲しくて勤務時間わざとズ

ラしてる。仲悪いわけじゃないんやけど。

向井 アンタも押入れ入ってみたら？

のぞみ、少し笑った。向井、鼻歌で『聖者の行進』を歌い始める。

のぞみ おねえちゃん。

向井 ん。

のぞみ それ、

向井 (続きを歌い始める)

のぞみ やめて。

向井 なんで。

のぞみ 縁起悪い。

向井 なにが。

のぞみ だってお葬式の歌やで。

向井 そうなん？

のぞみ うん。知らなかった？

向井 知らなかった。だって、陽気な感じやし。

のぞみ お葬式行く時は重々しくて、埋葬済んだら明るく賑やかに演奏するねん。

向井 なんで、

のぞみ さあ。魂が天国に行きますようにつてことちゃうかな。

向井 聖者つて死者つてことか。

のぞみ え。

向井 今日言うててん。この曲の「聖者」つて誰やるね、つて。

のぞみ 聖者は聖者ちゃうかな。

向井 キリスト。

のぞみ ううん、弟子。

向井 弟子。

のぞみ 聖パウロとか聖ヨハネとか言うやろ。

向井 ああ。

のぞみ 人のために生きた人。他人の幸せのために自分の時間を使った人。その人らの列に私も入れてくださいって。

向井 そんな歌やったんや。

のぞみ 知らんと歌ってたん。

向井 うん。合奏とかしてた。エアーで。

のぞみ アホやなあ。

向井 アホやわ。でも楽しかった。

のぞみ アカンよ、楽しいだけじゃ。

向井 アカンかな。楽しいだけじゃ。

のぞみ なあ。

向井 なに。

のぞみ ……

向井 どうしたん。

のぞみ 安心した。
向井 え。

のぞみ 数値、この辺はちよつとマシやねんな。

向井 日によっては出たくない時もあるけどな。アンタの方こそ、街はまだ高いやろ。
のぞみ 外は高めやけど病院の中は大丈夫。壁に鉛入ってるし。吸着剤飲んでるし。

向井 吸着剤。

のぞみ ここのごはん美味しかった。食べたあと薬飲まなくていいって全然違うな。

向井 また食べにおいで。

のぞみ 仕事、大変なん？

向井 まあ。でもアンタの方が大変やろ。

のぞみ どうやろ。

向井 大変じゃない仕事なんてないよ。

のぞみ お姉ちゃんとか、みんないい人そうやね。

向井 それだけが救いやわ。

のぞみ お金、結構かかりそうやけど。

向井 ああ。でもまだみんな自分でちゃんと払ってるし。

のぞみ 払えなくなったら五人で負担しあうって。

向井 そういう決まりやから。一応。

のぞみ やっていかれへんねんやったら、おねえちゃんだけでも、

向井 ありがとう。でもまだ今はここで頑張ってる。みんなと。

のぞみ そう。

向井 正直に言うとな、初めてこの家に来て五人で住み始めたとき、あれみたいやなっ
て思ってた。童話の

のぞみ 童話、

向井 ブレーメンの音楽隊。

のぞみ あったなあ。なんやったつけ、犬とニワトリと

向井 ロバと猫。みんな働けなくなったり、卵産めなくなったりして空家で一緒に暮ら
してる。

のぞみ みんなで力をあわせて泥棒を追い払ったり。

向井 そうそう。

のぞみ ブレーメンの音楽隊か。

向井 演奏はしてへんけど。

のぞみ したらいいのに。

向井 エアーで。

のぞみ じゃなくて。

向井 練習大変やもん。楽器高いし。ブラバンで懲りた。

のぞみ 頑張ってたのに。

向井 厳しかったからな。これ以上何かを強制されるのは、もう嫌や。

のぞみ あ、そうや。

のぞみ、カバンからハモニカを出した。

のぞみ これ、お姉ちゃんにあげるわ。
向井 ハーモニカ。

のぞみ ユーフオちゃうけど。

向井 どうしたん、これ。

のぞみ 知り合いが作った。

向井 知り合い。

のぞみ 今な、義肢の職人さんらが仕事の合間に楽器を作ってるねん。

向井 ギシ、

のぞみ 手とか、足とか。人口の。

向井 ああ。

のぞみ 病院でもな、できてるねん。入院してる人らで音楽のサークル。

向井 ブラバン？

のぞみ うん。でも楽器とかお金かかるからな、

向井 それで手作り。

のぞみ うん。ブラバンが一番人数多いけど、他にもジャズバンドとか、コーラスとか。
か。

向井 音楽って生きていくのに必要なんやな。

のぞみ バンドやっててな、もう自分はアカンなと思った患者さんは、他のやりたいって人に楽器譲ってたりする。

向井 え。

のぞみ そうやって人の手を渡り続けてきた楽器って、なんか気のせいかもしれへんけど、音が深い気がするな。

向井 これ、

のぞみ それは違うよ。新品。

向井 ああ。いいの。

のぞみ うん。たまにはエアージャやない楽器も練習して。

向井 ありがとう。

向井、少し吹く。

のぞみ なんやったつけ、それ。

向井 『旅愁』・あんな、時々思うんやけど。

のぞみ なに。

向井 音楽がお金やったらいいのにな。

のぞみ え、

向井 お金の代わりに音楽が流通したらいいのにな。よく映画とかドラマの中で田舎の診療所の先生に、治療代を払う代わりにトマトとかキュウリを渡す場面があるやろ。あんな感じでさ、病院で治療受けたら、お金を払う代わりに病院で歌ったり演奏したりするねん。

のぞみ なにそれ、

向井 そしたらみんな困らなくても済むのになと思って。

のぞみ まあまあうるさそうやな。

向井 でも、似てるよ、あると思わへん。
のぞみ お金と音楽。

向井 お金と神様は似てるって、何かで読んだことがあるねん。
のぞみ お金と神様。

向井 どっちも人間によって作られたもので、なくならへんし、奇跡を起こすことがある。
る。

のぞみ へー。

向井 じゃあ、音楽も同じかなと思って。

のぞみ 人間によって作り出されたもので、なくならなくて、奇跡を起こすから。

向井 うん。

のぞみ でも払う金額が高いのに、歌う人が下手やったらどうするの。

向井 上手いとか下手とか関係ないねん。

のぞみ え。

向井 だって歌えなかったり、演奏できない人もいるやろ。

のぞみ そういう人はどうするの。

向井 ただ生きるだけでいいと思う。ただ生きてるだけで払ってるよ、きつと。

のぞみ ……言葉は？

向井 え。

のぞみ 歌や演奏でもいいけど、言葉で払ったらいいんとちゃうかな。

向井 言葉。

のぞみ 言葉も、音楽やし。

向井 あんた、たまにいいこと言うな。

のぞみ たまには余計やよ。

向井 言葉か。

向井、はじめの音を少し吹き、歌った。

♪ふけゆく秋の夜 旅の空の

わびしき思いに ひとり悩む

恋しやふるさと なつかし父母

夢路にたどるは さとの家路

二人の歌声が重なって夜が更けてゆく。

暗転。

#5

早朝。

ポットを提げ、コップをトレイにのせて柿谷があらわれた。

テーブルにポットとトレイを置き、計測器の数値を見た。

柿谷 高いな、ちょっと。

柿谷、ポットからコーヒーを入れて飲んだ。

柿谷 あー。

のぞみ があらわれた。

のぞみ おはようございます。

柿谷 おはよう。もう行くの。

のぞみ はい。

柿谷 起こしてよか。

のぞみ いえ。昨日遅かったんで。寝かせてあげて下さい。

柿谷 コーヒーでもどう。

のぞみ いえ、

柿谷 まあそう言わんと。(差し出した)

のぞみ ……いただきます。

のぞみにコーヒーを受け取った。

のぞみ 美味しいですね。

柿谷 そう。

のぞみ 人に淹れてもらうと、よけいに美味しく感じます。

柿谷 今は朝、これ飲むためだけに起きてる気がするわ。

のぞみ わかる気がします。

柿谷 (飲んで) あー。

のぞみ (柿谷を見た)

柿谷 ごめんごめん。

のぞみ 静かですね。

柿谷 人少ないから。

のぞみ 気持ちいい朝って久しぶりです。

柿谷 なんか全部許せそうな気がするやろ。

のぞみ え。

柿谷 昨日まであったことも、これから起こるかもしれないことも。

のぞみ 許せそう、

柿谷 気がするだけやけど。世界って、美しいかも知れへんなって。

のぞみ そうですか。

柿谷 思わへん？

のぞみ 思いません。

柿谷 そっか。

のぞみ 世界は、醜いです。

柿谷 うん。

のぞみ 時々そうじゃないこともあるけど、だいたいは醜くて汚いです。

柿谷 前にさ、みんなでハイキングに行ってる。ここに住み始めてすぐやったかな。

のぞみ はい。

柿谷 低い山やったけど、楽しかったん。日の光も風の匂いも全部気持ちよくて、途中の道も木も、落ちてる石まで、なんか愛しく思える時間やった。嫌なことばかりあったから、それまで本当に、私、生きてしまってるよな、ってずっと後ろめたかったから。

のぞみ はい。

柿谷 途中、高台の草むらに小さい青い花が咲いててん。気をつけてないと見落としそうならい、ひっそり咲いてた。それ見たときにな、ああ、こういう風にいれればいいんやな、って思ってたん。

のぞみ そういふ風に。

柿谷 どこにいても、ただ根を下ろして生きればいって。時々そういうことを思い出す。せぼどこに流れても大丈夫なんやなって。

のぞみ きれいなのは花だからですよ。

柿谷 かも知れへんね。

のぞみ 人が作ったものは、きれいじゃない。

柿谷 でも、人も自然やで。

のぞみ え。

柿谷 人は人間だけのものじゃないよ。

のぞみ じゃあ私が醜いと思ってるものは何ですか。

柿谷 それもたぶん、美しい世界の一部なんちゃうかな。

のぞみ 一部。

柿谷 どうしようもない、怖い、汚い、救いのないものはあるけど、それもやっぱ美しい世界の一部なんやと私は思う。だからここでただ、根を下ろして生きればいって、そのことを忘れないようにしようって私は時々、草むらの青い花のことを思い出す。

真野が現れた。

真野 おはようございます。

柿谷 おはよう。

のぞみ おはようございます。

真野 パンでいいですか。

のぞみ いえ、私は。

柿谷 もう行くねんて。

のぞみ はい。

柿谷 ご飯だけでも食べて行ったらいいのに。

真野 お腹空きますよ。

のぞみ 大丈夫です。

真野 あ、ちょっと待っててください。

真野、台所へ行った。

清水と細川現れる。

清水・細川（口々に）おはよう。

清水 あれ、もう行くの。

のぞみ ええまあ。

細川 向井さんは。

清水 まだ寝てるんかな。

細川 ちょっと起こしてよか。

のぞみ いえ、大丈夫です。もう行くんで。

細川 え、

清水 なに、どうしたん？

柿谷 急ぐんやって。

清水 でも、なかなか会われへんのに。

細川 そうやん。

清水 向井さんは知ってるの。

のぞみ ……。

細川 やっぱり私、呼んでくるわ。

向井が現れた。手には便箋。

向井 のぞみ、

のぞみ ……。

向井 こんな手紙だけ残して行こうとすんな。

のぞみ ごめん。

向井 止めてもアカンの。

のぞみ ……ごめん。

向井 無茶やで。

のぞみ わかってる。

向井 なんて、

のぞみ なんてって、こっちが聞きたいわ。なんでこの国にいと大事な人と一緒に暮らせなくなるの。なんで住んでた家に住めなくなるの。なんで好きな人がおらんようになっていくの。なんでそれを私は見たのに、なんにもできへんの。なんで、なあ、なんで。

向井 だから出て行くの？ 苦しいのは同じやで。

のぞみ でも二人やから。

向井 ……。

のぞみ 今から言うことは独り言です。私は私の大切な人と遠くへ行きます。だからどうか私のことは忘れてください。この国に、私のようなちっぽけな人間たちが、ちょっと隠れて住める隙間がありますように。もしそんな隙間がなければ、見知らぬ国でひっそりと身を寄せあって生き延びられますように。だからどうか、私が今日ここにいたことも、全部ぜんぶ誰の記憶にも残らず忘れられますように。

向井、身につけていたカギを外して手渡した。

向井 これ、持っていき。
のぞみ カギ。

向井 今から言うことは独り言です。私は今日、この家のカギをひとつ、失くしました。どこにいったかさっぱりわかりません。でももし、拾った人が、もしどうしても行き場がなくて、眠ることも食することもできなくなったら、いつでも戻って使ってくれて構いません。だってここは働けなくなったロバや、卵を産めなくなったニワトリたちが、毎日楽しく暮らしているブレイメンの音楽隊の家だから。

のぞみ お姉ちゃん。

向井 氣いつけて。

のぞみ ありがとう。

のぞみ、去った。

向井 すいません、勝手に。

柿谷 いいよ。それより、行かんでいいの。

向井 え、

清水 送ってきたら？

向井 でも、

柿谷 私らは何にも見てへんかったし、何にも聞いてへんかったもん。なあ。

清水 久しぶりに会った妹をちょっとそこまで送っていくって、全然普通のことやで。

真野 向井さん。

真野、包みを向井に差し出す。

真野 これ、のぞみさんに。ちらし寿司。

柿谷 バラ寿司な。

真野 暑いから早く食べてもらって下さいね。

向井 うん。

細川 自転車のカギ、玄関な。

向井 みんな、ありがとう。

向井、出て行った。

柿谷 私らもご飯食べて行こうか。

真野 はい。

清水 ブレイメンの音楽隊か。

細川 え、

真野 言うてましたね。ブレイメンの音楽隊。

柿谷 じゃあ私、トランペット担当になるのかな。

真野 え。

柿谷、見えないトランペットで『聖者の行進』をワンフレーズ吹いた。

真野 じゃあ私も。一応学生の頃にやってたんで。

柿谷 え、真野さんもブラバン？

真野 はい。

細川 パートは何やったん。

真野 ファゴットです。

細川 ファゴット。

真野 って言うてもわからないぐらい地味な楽器です。

細川 なんか、ごめん。

柿谷 デジャヴや。

清水 私わかるよ。ブラバンやったもん。

真野 パートは何でした。

清水 サックス。

真野 なんか悔しいです。

柿谷 ブラバン率高いな。

真野 細川さんは？

細川 私、帰宅部。

清水 柿谷さんは？

柿谷 歴史研究会。だから楽器は全然できません。

みんな、少し笑った。

柿谷は見えないトランペットを構え、『聖者の行進』を演奏した。

真野がそれに加わり、清水、細川も音を重ねる。

四人はアカペラの合奏を続けた。

朝の食卓に『聖者の行進』が満ちていく。

溶暗。

終幕